

關西のアナキズム運動 (一)

— 戦前編 大阪を中心に —

日本アナキスト連盟

關西地協解放運動史研究部会

(一) はじめに

この記録のかなめのねらいは、戦前のこの国の解放運動史を
あざやかに色わけしたアナキズム運動の、ともすれば消えうせ
ようとする歴史的资料を、現存する諸先輩の口づたえを通じて
すこしでも書きとめておこうとすることにあります。東京で今
つづけられている、岩佐太郎氏等を中心としたこの種の企て
と、一方では呼応しながら、他方では資料をあつめるという仕
事のなかで、運動の今日までの道ゆきと、ありのままのすがた
を究めようとしています。そしてできれば運動の道ゆきに正し
い価値づけをこころみ、今後の運動の展開に役立てたいと考
えています。

さて、戦前のアナキズム運動をふりかえり、そのほんとうの
すがたをうきぼりにするなどということは、口でいうほど生や
さしいことではありません。才一に私たちをたすけてくれる運
動史の文献がほとんどないのです。あつても著者の思想的立場
や偏見のために、アナキズム運動は事実とちがつて不当に低く
ちいさくとりあつかわれ、かつその中には、かなりのあやまり
がふくまれているようでしたよりになりません。才二に運動その

ものの中から生みだされたおびただしい文献は、官憲の弾圧と
運動の中絶と、戦災のためにほとんど失われて私たちの手には
はいりません。そこで私たちのこの記録は、關西における多く
の労組、思想団体、研究サークル等について、それらの内容
や、仕事、役わり、そして推移など、語り手側に回想風なかた
ちで発表してもらい、それを私たちが質問しながら確認してゆ
くという手つづぎをとりました。

そして、まずはじめに關西におけるアナキズム運動を年表風
にまとめ、アウトラインを(特に大正十年前後から昭和十年前
後までのエボツクをややくわしく)あきらかにすることにしま
した。そしてその中から特に重要な事項をとりあげて、細部に
わたる諸資料をすくいあげ、運動史的な研究を加えることは私
たちのこれからのひきつづいての仕事とすることにしました。
また残念なことはこのコミュニケーションに参加された語り
手側の人数が多くなく、その顔ぶれが限定されていたため、い
きおい資料のさしだされたみなものが限定されて運動の流れが
全き姿においてとらえられず、あるいは事の軽重が正しく計量
されていないというおそれもないことはいし、記憶ちがいと
いうこともあるのではないかと思うのですが、それらの補足訂
正も今後に待ちたいと思います。

語り手

逸見吉三

河本乾次

笠原勉

久保譲

小松亀代吉

(二) 運動史年表

A 運動の芽ばえ

☆一九〇六年(明三九)

10月、大阪で、武田九平、武田伝次郎、岩出金次郎、森近運平、宮武外骨、松浦忠造、長谷川市松、横田宗一、安部庄吉といった人たちが「**社会主義研究会**」をつくりました。これが関西のアナキズム運動の最初の芽です。

☆一九〇七年(明四〇)

最初の日刊社会主義新聞「**平民新聞**」が1月15日に東京で発刊されると、大阪でも森近運平、武田九平、宮竹外骨等の手により、6月に半月刊「**大阪平民新聞**」が出されました。と同時に東京でも週刊「**社会新聞**」が創刊され、「**大阪平民新聞**」が幸徳秋水らの直接行動派のよるところのものであったのに対し同紙は片山潜らの議会政策派がよつたものとされています。しかし当時は、いわゆる社会主義未分化の時代でした。田中惣五郎著「**幸徳秋水**」にも、全国の**社会主義者の数は**きわめてすくなく、警保局一九〇九年(明四三)調べで、ブラックリストにあげられているものは全部で五三二名、大阪25、兵庫1、和歌山9、京都4、奈良4といった程度にしかすぎなかつたのです。

さて、「**大阪平民新聞**」は11月に才11号で「**日本平民新聞**」と改題して事実上直接行動派の機関紙となり、社会主義勢力が

二派に分裂する発端をつくりました。この頃から地方組織がさかんにつくられて、京都では**平民クラブ**、神戸の**社会主義研究会**、大阪の**平民社**等が統出しました。

またこの頃、日露戦争後の反動恐慌がはじまり自然発生的スト運動が激発、足尾銅山の大ストでは**労働運動と社会主義者(直接行動派)**との結合の端初ができました。

☆一九〇八年(明四一)

五月に「**日本平民新聞**」は才23号で起訴されて廃刊。

六月には東京錦輝館での**赤旗事件**があり、大杉栄、堺利彦等15名の検挙がありました。

経済恐慌は進展し、弾圧による社会主義運動の抵抗、アナキズムへの傾向強化がこの年の特徴といえるでしょう。

☆一九〇九年(明四二)

幸徳らの「**平民評論**」が3月に熊本から発行される一方、クロボトキンの「**パンの略取**」その他アナキズム文献の訳出がさかんにになりました。

☆一九一一年(明四三)

6月湯河原で幸徳が捕えられ、被検挙26名の大逆事件が発生大阪でも8月森近、宮下等13名が検挙されました。

9月には**赤旗事件**の堺、大杉らが出獄しましたが、大逆事件をきっかけとする弾圧のため、帰郷、転向、死亡があいつぎ、運動は漸時解体をはじめ、冬の時代がはじまります。

B 冬の時代

☆一九一一年(明四四)

一月大逆事件の判決。前にのべた森近、宮下らは死刑となり**武田九平、神戸平民クラブの岡林寅松(湊川病院事務員)**は無期となりました。

政府の弾圧陰謀によつて運動はますます困難となり、合法運動としては茶話会がもたれる程度となりました。あくる一九一二年(明四五)大逆文芸雑誌「**近代思想**」が大杉らにより10月発刊され、弾圧の中でかろうじて結束を固めようとはかりました。

☆一九一三年(大二)

7月「**近代思想**」の刊行と併行してサンシカリズム研究会が大杉、荒畑らによつてひらかれました。この年、軍閥・官僚と政党との対立が表面化して、軍閥反対の運動がおこり、大阪では**有志演説会**が2月にもたれ、これが大さわざとなつて官僚派の国民・報知新聞の各支社がおそわれ、神戸でもその直後、官僚派代議士邸や新聞社がおそわれました。

C 運動のよみがえり

☆一九一四年(大三)

軍閥反対の民主主義運動はいつそうたかまり、9月「**近代思想**」は才2巻才11号で廃刊、大杉らは**労働運動**へのりだし、月刊「**平民新聞**」を創刊しましたが毎号発禁となつていました。

(この頃は十一、二才でしたが、大阪の新世界の入口で平

民新聞の立売をしました。当時の新聞は定価一銭でしたが平民新聞は五銭、それでも一晩に二、三〇部は売れました。三田村四郎氏の弟六郎、七郎それに三田村氏のお母さんが売るのを手伝つてくれました。調査をしていた兄貴の三田村四郎氏に見つかると叱られていましたが、それでも一部に二銭五厘のリベールがあるのをよく手伝いにきてくれました。子供のごとで発禁になつていけるのを平気で立売して、たびたび近くの交番につれていかれて新聞をとりあげられました。(逸見吉三)

☆一九一五年(大四)

「**平民新聞**」が3月に才6号で廃刊されると10月に「**近代思想**」を再刊しましたが、連続発禁となつていました。

関西では、武田伝次郎、松浦忠造、岩出金次郎、逸見直三(以上大阪)山鹿泰治(京都)安谷寛一(神戸)村井林三郎(和歌山)等十四、五名が再刊「**近代思想**」の普及、研究等のために時おり集会をもつています。

この年才一次世界大戦の好景気がブルジョアシーをうるおし日本の工業は飛躍的に発展しはじめました。

☆一九一六年(大五)

「**近代思想**」毎号発禁のため、1月ついに才十号で廃刊。翌一九一九年(大六)にはロシヤ革命がおこり、日本では**労働条件**の悪化によるストライキ運動が激発、**労働運動再興**のきつかけとなりました。大杉栄、和田久太郎らは**労働運動**に手をつけ荒畑寒村の来阪によつて**友愛会**は5月神戸に、6月大阪に各連

合会をもうけました。

D 運動のたかまり

☆一九一八年(六七)

8月3日、富山県西水橋町漁民の米騒動が全国にひろがり、9日和歌山、10日大阪、京都、12日兵庫、奈良、三重等、3府25県467カ所、参加人員は614、900人にまでおよびました。

(大阪では、米一升20銭から25銭ぐらいたつたのが、たちまち50銭にはね上つたんだからたまらない。当時普通の労働者の日給は05銭、技術工で80銭程度でしたから大変です。始めのうちには米屋におしかけ大衆の力で安くさせる程度だつたのが、しいには無料で略奪するようになり、米屋がよそへかくしても、その場所をさがし出しておしかけ、街頭にひきずりだして持ち去つた。さらに米だけでなく他の食料品全般にまで暴動がひろがつていきおいでした。しかしこの米騒動は全国的なスケールのものではしたが、あくまで自然発生的なものでした。当時の社会主義者は人数もすくなく、一人一人に尾行巡査がつきまどつてゐる状態だつたので、この騒動を組織的にもりあげるなどとてもできなかった。大阪では一番さわぎのはげしかった今宮附近へ数名の社会主義者が見にいたり、秘密集会をやつたりした程度でした。個人的には藤田浪人が暴徒と共に活動して検挙されましたが、三田村四郎は巡査として暴徒検挙に大いに活躍しました。【逸見吉三】

☆一九一九年(大八)

この年の4月に岩出金次郎が出資して、荒畑寒村、鍋山貞親、花岡潔、大西昌、三野啓逸、岩出金次郎らは「日本労働者新聞」月刊を発行して、東京の和田久太郎らの「労働新聞」に呼応しました。この労働新聞の大阪方面配布は武田伝次郎がうけもつていました。

又同新聞主催で、大阪で堺利彦、生田長江らを講師に、労働問題大講演会をひらきました。これが関西における大逆事件以後中絶していた運動再建の第一歩でありました。

そして4月鍋山貞親、岸井清、新谷友一、大串孝之助、山田正一、小西武雄、花岡潔、津島忠孝ら各派社会主義者によつて関西労働者同盟がつくられました。これはいわゆる進歩派分子の同盟体のさきがけとなりました。また別に「関西労働者」(一、〇〇〇部)が発行されましたが、これはアナキスト的傾向の社会主義者のグループの機関紙でした。4号まで発行されましたが、1号は岸井清が署名人で、2号からは殿水藤之助にかかりました。(この人は舟乗出身で本職は盗賊、日用品すべて盗んでくらしていたという風変りな人物でした)

この間8月に友愛会が大会をもち、大日本労働総同盟友愛会と改称して、階級斗争主義への転向をはじめると、アナ系の労組は東京15新聞社の製版工によつて革進会(6月)水沼辰夫らの欧文工組合信友会(5月)正進会(12)が成立、あるいは再建され、大阪でも4月に関西労働者同盟を中心に関西労働者大

(僕は京都にいて部落の人々と共に米屋襲撃に参加した。日がくると米屋は大戸をおろしてふるえている。その前に集つた群衆が石をなげて米屋の外灯を破ると一せいにときの声をあげる。その頃巡査がかけつけて、群衆の一人をとらえようとする。他の者が間に入って妨害する。群衆が「そう大きな声で「ヤレヤレツ」とどなると巡査がにげだす。そのすきに気のきいた者が米屋の荷車をひきだして道路から大戸に向つて、ガラガラドシンと打ちつけると、大戸はこわれてたおれる。そこから女連がザルをもつてとびこんで、三十銭ずつだして勝手にマスではかつてもつて行く。そして米屋のおやじに表へ「米一升三十銭」とかきだせと要求する。米屋がかいて表へはつた時分には、もう一人もその辺にいのこつてゐる者はない。こんな風にして米屋は片っぱしからやつつけられた。その時、大杉が大阪へきていて、京阪の同志は大阪の逸見氏宅で会合した。大杉も日がくると、どこかへいつては一仕事してきた。【山鹿泰治】)

この自然発生的な大衆運動が、階級斗争への転機となつて、大阪では「労働新聞」を中心に荒畑らサンジカリズム的傾向の人々が集つてL・L会(自由と労働)武田を中心に社会主義研究会(この会には後にアナキストになつた人が多かつた)神戸では安谷寛一を中心とするグループ(この中で後に川崎造船所の大ストライキ(大正10)の中心になつた人たちがそだてられた)その他がつつぎに組織化されはじめました。

☆一九二〇年(大九)

会が天王寺公会堂でひらかれました。主催者は、逸見直三でした。(この大会には山川、大杉をのぞく当時の一流人物、荒畑寒村、堺利彦、賀川豊彦ら全てが顔をそろえて大へんな盛況でした。賀川豊彦は、そのキリスト教的な演説ぶりを労働者にモウレツにヤジられていたのをおぼえています。【逸見吉三】)このように社会主義運動の復活、近代的労働運動の全面的復興と組合組織運動の画期的な展開のさきがけがみられるのがこの年の特徴といえるでしょう。

☆一九二〇年(大九)

「クロボトキン研究」をめぐる東大の森戸助教授の事件が1月におきて、アナキズム、サンジカリズムへの関心が全国的にたかまつてきます。

5月、逸見直三らの借家人同盟が大阪で結成されました。(この頃物価があがり、特に家賃の値上げがひどかつた。労働者が月に15円から30円ぐらいの収入しかなかつたのに、家賃を8円から10円ぐらいただきないと家がないという状態で、ついには月収の40%以上にまでなつた。それで家主とたたかうために借家人同盟ができ、この同盟の斗争のちに借家法制定の動機となつたのです。また同盟は借家問題だけではなく、ひろく労働者、小市民の生活、法律相談所にもなつていました。【逸見吉三】)

また同月には、武田伝次郎らによつて自由人連盟が組織されています。(これは年輩の人が多くて、研究会的なものだつた

僕がこの会へ出ると、あんな会には出るなと鍋山等に注意されました。【逸見吉三】

他方中央では、労働運動や思想結社の連合運動が活発になり労働運動では、最初のメーデーデモの会計報告会での提議がもとになつて、正進会、信友会が参加する全国的労働組合連合組織である日本労働組合同盟会が5月に発足しました。

思想団体でも、オースティン・アシア事務局主催の極東社会主義者会議に出席した大杉の帰京をまつて、12月に日本社会主義者同盟がつくられ、社会主義、労働、学生の各団体を網羅した会員三、〇〇〇名の全国的な組織ができました。

この前年ごろから本格的にマルクス主義が日本に移植されてきていますが、大戦後の経済恐慌に対して組合を防衛するためこの年ごろいわゆる「アナ」「ボル」は共同戦線を結んでいました。そして社会主義運動と、労働組合運動との組織的結合が始まっています。しかし組合内部ではいわゆる「普選」問題をめぐつて、直接行動派と普選派との対立のきざしがみえてきました。

12月には、大戦後の反動恐慌による失業者続出のため、大阪で**全国失業者大会**がひらかれました。

（秘密出版術―言論圧迫時代に四面敵の中でのこの仕事は原則として決して他人に相談しないこと、でなくては必ずずバシることを覚悟せねばならなかつた。まず自分で書いた原稿を持つてとびとびに数頁にわけて数個所の印刷屋で組んで紙型を

フレットにして、表紙はパン略の出版広告の形式にして、データラメの出版屋の名を入れた。これはとてもぼくらの所の貧弱な活字では組みきれないので、他の同業者のところへ取次の形式で注文した。本屋の広告だと思つて安心してやつてくれた。次に京大の米田庄太郎と河田嗣郎のシンジカリズムの研究の論文が「経済論叢」に出たのを骨子として、日本の社会運動史のようなものと組合せて、「シンジカリズム」というパンフレットを作つた。序にエス文のポール・ベルテロ作「平民の鐘」原名「時の福音」というのも作つた。【山鹿泰治】

E アナ・ボル対立の時代

☆一九二一年(大一一〇)

5月に社会主義同盟のオ2回大会がひらかれ、約三千人が集りましたが解散させられました。8月には暁共産党が組織され、綱領・規約・方針等が定められ、いわゆるアナ・ボルの対立の時代が始まります。

1月に大杉らは「ボル」の近藤、高津と共に、週刊「労働運動」を発刊しましたが、6月に13号で廃刊。これはアナ・ボルの協同戦線の破壊を意味していました。4月には正進会、黒潮会、芝浦技工組合、自由人連盟等各団体のアナキスト三十数名によつて「労働者」が発刊されました。さらに12月には大杉、和田、近藤、伊藤等によつて三度目の「労働運動」が出されています。これはアナキストの機関紙でした。

とらせる。それを集めて鉛版屋へ持つていつて、待つている間に鋳込ませる。そしてそこで文章も読まれないようにすばやく金を払つて受取つて帰り、次は場末の小さな印刷屋で、製本屋の落ちの刷り足しだという名目で、又幾頁かを刷らせる。刷れたら集めてきて、自分で針金でとじてやつとでき上げる。ここまできついたら、まくのは仲間にかけても、各自が自分の分だけの責任だから、出所は知らないでもすむわけだ。

警察へあげられたら「知らない」「忘れた」をくりかえしている、29日間の拘留か、「たらい廻し」といつて、市内各署のスパイに「面」を知らせるため、4、5日宛回覧させられて帰りに電車賃50銭位くれて放免になつたものだ。

この単独でやりとげることが仲々骨が折れるので、でき上らないうちに応援を求めて失敗に終り、同志に大きな迷惑をかける場合が多かつた。ぼくは一九一九年の2月に京都でブン捕まつて、数人の協力してくれた人々を長い間途づれにするの愚を演じた。その頃、京都の小さな印刷屋をやつていた兄が死んでぼくが後を任されたのを幸い、先ず幸徳の獄中から、磯部弁護士その他にあてたながい手紙を組んで天地6寸の紙にベタ組で2尺以上のものになつた。やつとでき上つた時、スパイがぼくをかぎつけて、親戚をあさり始めたので、一枚も出さないうちに、家の者にやきすてられてしまつた。次は工場の諸君と相談してもつと大きなものをやることにして、石川三四郎氏の「西洋社会運動史」の中にかいてある「パンの略取梗概」をパン

10月、友愛会9周年大会で日本労働総同盟と改称しましたがゼネスト論対団体交渉論が対立しましたが、ゼネスト論が優勢でした。この総同盟内部には野武士組という青年行動隊的なグループが発生し、大阪では野田律太、大矢省三、山口鉄吉等二三〇名が拠つていました。

尚大阪では借家人同盟が2月にオ一回演説会を、同じく5月には同盟大会をひらいています。この年5月のメーデーははじめての全国的メーデーでありましたが、6月には昨年結成された労働組合が同盟会友愛会系と、正信会、信友会等のアナキスト、サンジカリスト系との対立抗争のため崩れかいています。

6月25日、神戸、三菱、川崎兩造船所で三万五千人参加の**大争議**が発生。45日間にわたつて斗争をつづけ、弾圧に軍隊も出動して、三百余名の死傷者が出るという、当時としては歴史的な事件でありました。この争議に安谷寛一のそでた、大蔵辰夫、望月、木谷、近藤兄弟等が中心人物となつて大いに活躍しました。

（安谷寛一は「平民新聞」「労働運動」等大杉栄の出版物の神戸方面の配布責任者でした。フランス語ができたので、大杉のホン訳の下うけなどもしました。著書に「牢獄の花嫁」(バークマンの獄中記)「大杉栄遺稿集(東京金星堂発行)その他があります。)

(この争議に賀川豊彦が参加して、有名な「死線をこえて」(改造社発行)を出しましたが、この本は、ものすごく売れま

した。【逸見吉三】

(先にのべた「野武士組」は会社をクビになつた組合員の反幹部斗争の集団でして、争議の応援に関西各地をまわり歩きました。当時総同盟は関東ではふるわず、関西が中心でしたが組合費だけではまかないきれないので、賀川豊彦の出す金にオンブされていきました。したがって賀川の影響力は相当強かつたのですが、野武士組の活動によつて、賀川の非暴力主義は総同盟内より一掃されるにいたりました。この野武士組の青年たちがのちに総同盟を牛耳るボスになつたわけです。【逸見吉三】)

(この頃、社会主義運動、労働運動とも、ますます拡大発展していくわけですが、政府の弾圧はいぜんとしてひどいものでした。われわれの集会には50人ぐらいがいつも集つていましたが、釜場の空気がもり上つて、これからというときに警察がふみこんでくるのですから、会をはじめ一時間もつづけられたいい方でした。大杉がきたときつい分集りましたが、大杉がマラテスタの宣伝革命の話などしたのをおぼえています。警察にふみこまれて百人近い人が町の中を堂々と革命歌をうたいながらひつぱられてゆきました。【逸見吉三】)

(大正10年ごろ京阪神でブラックリストのつていた人は二百人ぐらいでした。その中、甲はカンゴクイりをしたところのある者、乙は拘留五、六回、あるいはストライキの中心人物だつたとか、丙は会合によく出ている者だとか、シンパだとかいう風に四段階に区別されていきました。甲にはいつも尾行がついて

総同盟派の集中合同論とが対立して、たがいにゆずらず、とうとう総連合は不成立におわりました。そして10月には総同盟はその大会において綱領を改正して、自由連合を排撃しましたので、ここに総連合運動は完全にくずれ去りました。これよりアナキスト系は自由連合派とよばれるようになります。こうして各派は各々の機関誌や出版物によつて活発な論戦をくりひろげるようになります。

(この大会に参加したのは、総同盟、官業労働、海員組合、関東労働組合同盟会、関西労働組合同盟会、それに各府県の方連合で、動員率は反総同盟派の方が高かつたのですが、分裂のあと総同盟内へボルの連中が入つて、積極的に中央集権的組織にもつていつたわけです。【逸見吉三】)

この頃の労働組合員の人数は総同盟が約二五、〇〇〇人(その中官業労働組合が約五千、海員組合は一万人程度)自由連合派の関東労働組合同盟会は水沼らの印刷工の組合、宇野信次郎らの機械工組合を中心に約八、〇〇〇人、関東では組合同盟会六〇%、総同盟四〇%という勢力比でした。関西労働組合同盟会は前にのべた鉄工組合等の他に純向上会、大阪鑄造工組合、それに紡績労働組合同盟が参加して約五、〇〇〇人で、組織労働者の数は全国で約五万人程度でした。

この年5月には姫路で「パンの略取」の秘密出版が発覚して高橋辰三郎(二九月)大蔵辰雄、寺田格一郎(罰金六〇円)の判決がありました。

いました。ストライキの中心になると、かならずクビになりまし、ストライキをやつただけで、もう法意人物になるのですから、再就職などとてもできません。だから職業革命家の道を進むわけです。当時は啓蒙的な新聞や、パンフなどを売つてあるいて、なんとか喰つていけました。【逸見吉三】)

☆一九二二年(大一一)
一〇年の12月に関東のサンジカリズム系の組合は関東労働組合同盟会を結成しましたが、これに呼応して関西では、鉄工、造船、日本機械技工、友禪工、京都・大阪印刷工、自由、皮革工等の反総同盟系組合一〇、〇〇〇名によつて関西労働組合同盟会が、この年十月に結成されました。この結成の中心人物は阪本孝三郎でした。

6月には東京で純労働者組合等6組合が合同してサンジカリズム系の機械労働組合同盟会ができ、9月には大阪で、倉地敬司、中尾正義等のサンジカリズム系の紡績労働組合同盟が総同盟より分離して成立しました。

これよりさき5月3回メデーが全国的に行われ、東京のメデー報告会に全国総連合の提議があり、大杉等の努力によつて、9月大阪の天王寺公会堂で日本労働組合總連合の結成大会がひらかれ、五十九組合一〇六代表が集りました。この大会の理論的指導者は自由連合派は大杉栄、集中合同派は山川均でした。ところが大会の席上で、総連合の組織原理について、水沼辰夫氏を中心とする組合同盟会の自由連合論と、西尾末広ら

又1月日本共産党が成立、8月の「前衛」に山川均の「無産階級運動の方向転換」が発表され、これが労働組合の政治運動への転換をめぐるアナ、ボルトの対立抗争をいよいよ深めました。

☆一九二三年(大一二)
1月に大串孝之助らの関西組合同盟会は機関誌「社会運動」を発刊しました。

5月、東京で正進会、信友会、京都印刷等は合同して印刷工組合連合会を結成しました。8月には東京で反総同盟系の組合の統一をはかる運動があつて大阪からも代表がかけました。

尚大正9年、大戦後の反動恐慌がおこつたのち農業危機は表面化、大正10年に中間景気になりましたが、またつづれ、独占資本の形成がうながされ、11年には才二次反動恐慌がおこつて不況は慢性化、12年には農業危機は恐慌のために一そうはげしくなり、農業は資本主義化する傾向がみえてきました。

そして大阪で1月に失業問題大演説会、3月には失業者大会がひらかれています。8月、神戸でアナキストの思想結社黒刷社(和田信義)より「黒い仲間」が創刊され、大阪では久保謙小西武夫、備前又次郎、山田正一、篠部兄弟らの、黒社より「黒」がだされました。これは月刊タブ4ページで、毎号五〇〇部から一、〇〇〇部発行していました。

この頃から京阪神に、さまざまなアナキストの思想団体が続々と結成されます。

9月に関東大震災がおこり、その混乱に乗じて亀戸事件や大杉栄、伊藤、野枝ら多くの社会主義者が、憲兵や警察の手によつて不法に虐殺されました。これに對して11月、12月にかけて、関西各地では事件の糾弾運動が展開しました。

9月2日才2次山本内閣が普選実施を声明したのをきつかけに、11月関西労働同盟会から、議会利用をとなえる政治運動派の、八木順一らの純向上会（砲兵工廠）坂本孝三郎の大阪鉄工組合、造船労働組合等が脱退して、あらたに日本労働組合連合会を結成しました。分裂を決定的にしたのは、政府の普選実施の声明ですが、もうひとつの原因は震災を機に急にはげしくなりだした政府の運動への弾圧でした。こうした直接行動派と政治運動派との分裂は関東でもおこつていました。

又このころ関西自由労働、青年労働、組合有志によつて「自由連合」が創刊されました。

F 苦斗の時代

☆一九二四（大一一三）

1月、神戸八王寺で神戸在住有志主催の**大杉栄追悼会**がひらかれました。

4月には、大崎和三郎らの**神戸自由労働組合**が結成されました。

9月**関東労働組合自由連合会**（サンジカ系）が成立しました。9月1日和田久太郎ら大杉の復讐のため、福田大将暗殺をく

みましよう。

①大串孝のグループ「文明批評」や中浜哲の詩集「黒パン」等を発行。詩人団体。

②逸見吉造のグループ「自由連合派の組合で活動」。

③平井貞二のグループ。

④生島繁のグループ「大阪印刷工組合の代表的人物、石川三四郎さんなど来阪のたむによく宿泊された」。

⑤関谷栄のグループ「主として会社廻りをやった」。

⑥遠藤喜一のグループ「大阪市出身。市電従業員中に、アナキズム研究会「自由思想会」をこしらえ、大阪交通労働（大13・11）を結成、雑誌「自由連合」を発行した」。

⑦京都印刷工組合のグループ「福島佐太郎ら印刷工組合のメンバー」。

⑧安谷寛一らの**ロンタ組**「神戸の文学グループ」

⑨中尾正義のグループ「一番活動的で「斗い」「黒馬車」「関西自由新聞」を発行した」。

⑩木本凡人のグループ「これはアナキストとはつきり称するグループではないが、この人の家には当時、若いアナキストが居候して世話になった。青十字社、先駆者同盟を組織して、失業者同盟や、水平社創立に裏面から援助した」。

⑪黒社「久保譲らアナルコ・サンジカリストのグループ」

⑫極東平民「大崎和三郎、関西自連のグループ」

⑬**文明批評**「神戸の和田信義らの文学サークル（河本乾次）」

わだててはたさず、10日には古田次郎、村木源二郎がつかまれました。大阪でも中浜哲らのギロチン社が、大杉復讐のためテロ団体を結成しました。

10月、神戸で大崎和三郎らによつて「**極東平民**」が創刊されました。

11月には大阪の九条会館で、直接行動自由連合主義の諸組合によつて、**関西労働組合自由連合会の結成大会**がもたれました。12年の政府の普通選挙実施の声明は、しだいに革命化しようとしていた社会運動に安全ベンをもうける意図のものでしたがこれに應じてこの年無産政党結成準備会が全国に続出しました。12月、和田信義の「黒い仲間」は「**文明批評**」と改題して発行されました。

☆一九二五年（大一一四）

和田信義、安谷寛一らの「**悪い仲間**」が発行されました。

3月、普通選挙法、および治安維持法が可決されました。

4月、総同盟内の共産主義者は分裂行動を開始して、革新同盟を結成、5月総同盟中委は革新同盟の25組合を除名、被除名組合は神戸で全国大会をもち、日本労働組合評議会を創立しました。

6月、京阪神のアナキストの各思想団体は、**関西黒旗連盟**を結成しました。その中心は久保譲の黒社、中尾正義の斗い社、和田信義の黒刷社等ですが、その他多少年代は前後しますが、当時京阪神にあつて活動したアナキストの思想団体をならべて

東京では12月に**黒色青年連盟**が結成されて、関東方面のアナキストが結集されることになりました。その機関誌は「**黒色青年**」です。

そのころ神戸で「ボフスタンチズムの提唱」（リーフレット（労働自由連合運動）宇治木一郎著が発行されております）

☆一九二六年（大一一五）昭一

「悪い仲間」にのつた岩佐作太郎の幸徳事件犠牲者に言及した一文が不敬罪に問われて、一月に発禁となりました。メンバーの上月岩太郎はこのため懲役一年の判決をうけました。（その他の主なメンバーは和田、安谷、高橋でした）

1月31日**黒色青年連盟**は東京芝の労働会館で演説会をひらきその解散のながれがデモになつて銀座へ進出、ブルジョアの菓クツをやつつけろという氣勢で、一丁目から尾張町まで片側の商店は全部こわされるといふわゆる銀座事件がおこりました。4月に、これまで関東地方のみの結集体であつた**黒色青年連盟**は改組して、アナキストの全国的連合組織とすることになり各地方に同連盟の地方連合が結成されました。そのため、すでに関西地方のアナキストの連合体として結成されていた**関西黒旗連盟**も、また**黒色青年連盟**の「地方連合」として、**同連盟**に入ることになりました。当時**関西黒旗連盟**のメンバーは六〇人から一〇〇人ぐらいでしたが、出版活動、演説会、また他の団体との立会演説会、あるいは反動演説会のぶちこわし、デモストライキの応援など大いに活動して、検束者の出ない月など

ないありさまでした。

また解放文化連盟(六一四)が生れ、そのメンバーとして、大阪では、小野十三郎、阪本遼、安西冬衛、三好達治、山之口、瀧らが文学活動をくりひろげていました。

組合関係のみてみますと、1月には自由労働者組合の大会がひらかれ、3月には東京で、先に分裂した関東労働組合同盟会のうち、サンジカリズムの立場にたつ諸組合が、関東労働組合自由連合会を結成しています。さらに5月には、先に結成された関西自連と合同して、全国労働組合自由連合会を結成しました。機関誌は「自由連合」でした。

(関西自連の主なメンバーは、皮革、友禪、紡績、印刷、自由労働、の各組合で、かけ値のない実力は一、〇〇〇人ぐらいで上田益吉、矢野準三郎等が中心でした。【逸見吉三】)

この頃前年の普選法成立にひきつづいて、合法的無産政党が結成されたり、禁止されたり、成立したり分裂したりしてしました。

☆一九二七年(昭二)

神戸の岡崎龍夫、増田信三、笠原勉、中村一次、宇治木一郎、長沢清、春田武夫らが3月に黒斗社を創立、月刊雑誌「黒斗」を発行しました。また同社は八田舟三著「自然科学と無政府主義」を刊行しています。

同月、やはり神戸で、安谷、中尾吉之介、和田、飛地義郎、牧寿雄、小林輝、田代建、坂田一郎らの文学サークルが「ラ・

合会等を除名するにいたりました。

5月、アナキスト系の農民団体、農民自治会全国連合が成立しました。

目をへるにつれ黒色青年連盟はいよいよ末期的症状をあらわにし、まじめな理論斗争、あるいはアナキストとしての共同斗争はかげをひそめ、立場をことにする人たちに一方的に暴力をふるう、いわゆる一部のアナキストの機関となつてしまひ、全国アナキストの結集体としての意義は失われはじめました。

そこで関西黒旗連盟の有志は、黒色青年連盟の浄化運動にのりだし、逸見吉三編集の「黒色戦線」はその矛と号の主張に「いたずらに暴力をふるう不良少年の分子を追放せよ。不良少年の暴力は決して革命的行為ではない。それは大衆をわれわれから遠ざけるだけである」と警告して、労働組合の日常斗争を商取引だとする、東京の一部の人たちの労働組合運動軽視の風潮に対して、サンジカリズムの旗色をあきらかになりました。

(この頃よりアナナルコ・サンジカリストの多かつた関西のアナキストが、関西アナと通称されるようになりました。【久保讓】)

この年10月、中尾正義らは月刊「関西自由新聞」を約千部発刊、主に関西自連の組合へ配布しました。

☆一九二九年(昭四)

黒色青年連盟の内部対立、分裂抗争ははげしくなるばかりで「文芸解放」の壺井繁治、江口換、岡本潤等にも個人的暴力を

ミノリテ」を創刊しました。

7月に、南海電車才二回目の争議で、争議団の高野山籠城事件がおこり、河本乾次を中心とするアナキストが大挙応援に参加しました。

この頃から、東京の黒色青年連盟内部において、八田舟三、岩佐作太郎の反サンジカリズム的傾向が発生、これがしたいに黒色青年連盟の主流となりましたが、関西では組合運動がさかんだつたために大した影響はありませんでした。

11月に全自連の大会がひらかれ、汎太平洋労働組合会議への出席の可否、アナキストの労働組合運動のあり方について論戦がおこり、大会は混乱しました。

又この年には大金融恐慌がおこつて、資本の独占集中化が発展し、財閥の制覇が確立することになります。

☆一九二八年(昭三)

3月15日、才二次共産党の全国的な検挙がありました。

東京の黒色青年連盟では、サンジカリズムをアナキズム革命のための手段としてみとめない、純正アナキズムをとる人たちの一部が、ますます極端な行動をとるようになり、アナナルコ・サンジカリズムの立場をとる人たちが、ボルシエビストと同一視して、これに暴力をふるうような状態になつてきました。そうしてこうした黒色青年連盟内部の動きが、全自連内にもまでもちこまれて、3月、東京での全自連才三回大会では綱領の改正をめぐつて対立、サンジカリスト派の関東自由労働者連

ふるう、東京の一部アナキストに占有された黒色青年連盟は、遂に関西黒旗連盟を除名するにいたりました。一方全自連も内部対立がつづき、黒連主流派に占有される状態となつて、有名無実の存在となりつづきました。そこで関西自連は、全自連と訣別して、4月に全自連の除名、脱退の諸組合をあわせて日本労働組合自由連合協議会結成の準備会をひらき、新しい連合体を結成するようになりました。また東京でもこれに同調した脱退派が、東京印刷工連合会を同月に結成しました。

もちろん、東京地方のアナキストが、すべて黒連派(分裂後の)ばかりではなかつたのと同様に、関西黒旗連盟のアナキストもすべて反黒連派だつたわけではありません。その主流は黒連とは訣別しましたが、その他関西自連の組合内部に平井貞二等の黒連支持派があり、その中間に、黒連に対して批判的な立場をとりつつも、分裂をさけて黒連の人たちと手をつないでいこうとする河本乾次や生島茂(印刷工組合)等のグループがありました。そうしてこれら三つの流れは、関西黒旗連盟や、関西自連の内部で論争を展開していたわけです。それ故関西自連の組合の中にも、日本自協へは参加しないで、印刷工組合や、泉州一般労働のように全自連の中にとどまつた組合もあつたわけです。

G、暗黒の時代

一九三一年(昭六)

こうして、遠くは自由連合主義と、中央集権主義との対立に

よつて始つたアナキストの組合運動は、普通選挙の実施による政治運動派との分裂、さらにアナキスト陣営内部の対立抗争、組合運動軽視の風潮がこれに拍車をかけたため、分裂はさらに新しい分裂を生んで、漸次下降の様相を呈しはじめました。

一方関西黒旗連盟も、分裂は運動そのものをおとろえさせ、運動のおとろえは全員をいらだたさせ、あせりにあせつた行動の、その効果のなさが、感情的対立を生む、というちようど雪だるま式の逆の運命をまぬがれることはできないで、東京の黒色青年連盟と共に、自然消滅の道をたどるようになりました。かくて関西黒旗連盟は連合体としての動きをやめ、各人は一人一党的小グループにわかれて、それぞれの機関誌をもつようになりしました。

この年3月に河本乾次、遠藤喜一等交通労働者によつて創刊された「自由連合」もその一つですが(約10ページの雑誌で五百部程度出ていました)その他に中尾等反黒連派の黒馬車(20ページから30ページの雑誌で、五百部から千部発行)大串孝等の「祖国と自由」(「文明評論」の後身40ページ、五百部程度発行)高田、関谷等の解放バツク(これはマンガの雑誌で中山照というすばらしいマンガをかきました)

5月、大崎和三郎のあとをうけて、多田英治郎、高橋利夫、山本哲、宮本某等の神戸グループが「自由労働組合」を結成しました。

8月には黒色青年連盟の後身、黒色戦線社の一せい検挙があ

味してしまいましたし、組織労働者の数もすくなかつたために運動資金の出どころも乏しかつたのです。そのため一部のアナキストは出版物をもつてブルジョアや大会社をまわり、運動資金を集めたりしました。ところが運動資金が生活費に流用されるようになり、しまいには会社まわりが職業化して、運動のためではなく、全くの生活手段となつて、いわゆるリヤク屋とよばれる一群が発生しました。運動全体にとつてはマイナスでしたが当時の、今日から想像もおよばない困難な状態のもとでは、やむをえなかつた点もあると思います。(逸見吉三)

(当時のメーデーは今のようなお祭りさわぎのメーデーではありません。ほんとうに階級斗争の日であり、たまたかの場でした。メーデーの会場にのりこんでくる労働者の多くは、ほんとうに高い階級意識をもつた戦斗的労働者でした。警察はメーデーの前日に、戦斗的労働者の主な者を検束しようとし、メーデーの前にはどこかへにげかくれしなければなりません。うっかり自宅でつかまつても、新世界の街頭で革命歌をうたつていたとかいう、全くデタラメな理由をつけられてブタ箱いりです。メーデー当日も、警察は何台もの検束用トラックを用意して、ウの目、タカの目でまぢかまえています。これと違う者をみつけると、スクラム毎に横にハジキだして、ウムをいわさず集団検束して、トラックに横にハジキだして、ウムのメーデーは、中ノ島公園に集合して、天王寺公園までデモ行進するのですが、こんな調子で検束、また検束、私は十年間ぐらい

り、相つづ弾圧のため、漸次結社が解体しはじめ、この当時より各アナキストは全く孤立化していききました。

(さまざまなグループから、いろんな雑誌や新聞が発行され、二、三号出てはきえてしまい、また同じグループの手で発行者をかえ、改題されては発行されるといふのは官憲の弾圧のためで、資金をかきあつめて発行しても、発禁また発禁で署名人は次々ひつぱられるし、現物は印刷屋でおさえられて代金は回収されない状態ですから、全く資本の面で手をあげてしまいますこれらの出版物の配布対象は主に労組員でした。【逸見吉三】

昭和3年、巨額の救済資金の放出で、恐慌をきりぬけ短期的には活況となりましたが、同時に資本主義的産業合理化がすすみ、永久失業者等がしだいに増大してきました。合法的無産政党は離合集散をくりかえし、共産党は弾圧されては再建されてきました。昭和5年には世界恐慌の波がこの国にもおしよせ、階級斗争の波はたかまりましたが、それに比例して支配階級の弾圧もまたますますはげしくなつていきました。政府は普選の実施によつて労働者の革命的エネルギーを、国会利用、政党結成の政治活動へそらし、政党は労働運動へ分裂をもちこみ、その団結をよわめました。普選法が労働運動にブレーキをかけるアメとすれば、同時に成立した治安維持法は強力なムチであつたともいえるでしょう。

(當時は言論、集会、結社の自由など全くありませんでした運動にとびこむことは、同時に生活の道をとざされることを意識)無事に、天王寺公園までたどりついたことは一度もありませんでした。もちろんこんな不当な検束にはこちらも抵抗するものですから、天王寺公園へつくまでに旗はポロポロにやぶれ、竿はおれるというサンタンたるありさまになります。もちろん検束される理由などないのです。「不穩ノ言動アリ」という調子で、実にカンタンにひつくるのですからお話になります。また中ノ島公園から天神橋へ上る階段のところで参加者の写真をとつていました。集団検束された中に新顔がまじつていと、早速トラックリストの仲間入りでした。同志だけの秘密集会の他には、どんな集会にも警官が臨席して、中止、中止解散ですし、要視察人甲には、どこへゆくのものにも年中巡査のおともつきです。【逸見吉三】)

☆一九三〇年(昭五)

恐慌はつづき、農業危機の尖鋭化による農民斗争ははげしくなり、はげしい弾圧にもかかわらず、階級斗争の波は高まつていきました。この頃自協には関東、関西(大阪、京都、神戸、滋賀県)九州、それに名古屋の各組合が参加していました。

9月には満洲事変がおこり、恐慌はおわり、軍事工業は活況を呈しはじめます。政府は全産業の統制をはじめ、国家権力によつて、カルテルを助成、資本の独占化を促進しようとし、労働争議の規模は縮小してきましたが、かえつてその分野はひろがり、長期化し、戦術も多様化してきました。軍部は対外武力行動を拡大する一方、国内クーデター計画し

ていました。事変にもなつて右翼反動団体が続出してきましたが、労仲組は反帝、反ファツシヨ斗争の方針をあきらかに打出してました。

☆一九三二年(昭七)

1月に上海事変がおこり、5月軍部の急進分子と右翼のテロリスト等による五・一五事件がおこりました。

社会主義運動への弾圧は強化され、労働運動の分裂は次々におこり、労働組合の一部には日本主義、ファツシヨ化の方針を打出すものさえあらわれる状態になり、全般にあらゆる運動が衰退のきざしをみせはじめました。

しかし暗黒時代を前に、若干の文化的活動は活発に続けられていました。従来からこの方面には熱心だつた神戸では笠原勉の「戦線同人」さらに9月にはいり、笠原、芝原淳三、三木滋治、井上信一、長沢清、小林一信、山口安二らによつて月刊「近代思想」が、アナキズムの立場よりする文明批評誌として発行されました。

☆一九三三年(昭八)

階級斗争の波はおとろえ、弾圧はますますはげしくなり、共産党内には転向問題が発生し、社会大衆党は国家主義へ転換しはじめました。労働運動も検挙と方針転換により、しだいに低調弱化するをくわえます。

3月、神戸の自由労働組合事務所に、「自由連合新聞神戸支局」がもうけられました。

ます。

このような情勢の中で、全国自連と自協とは合同して、自連を再建、再統一することになりました。しかしこの頃はもう加盟組合の数もすくなくなつていまして、実数は三、四千人でした。その組合は東京では、東京印刷工、芝浦労働、ガス、東京一般、江東自由、それに各府県の単産十くらい、京阪神では、**京都一般、京都印刷工、大阪自由労働、金属労働、その他に三組合、および神戸、それに中部黒色一般等**でした。

(この統一合同は、思想運動、労働運動にゆきづまりつつあつた共産党が、この合同に乗じて党の細胞を自連にもこしらえる目的で、促進したのに自協のつていつたという見方もあります。【逸見吉三】)

8月、純正アナキズムとアナルコ・サンジカリズムとの理論斗争のもつれから、佐竹良雄ら(神戸自由労働)と、近代思想研究会(芝原、井上ら)の一派とが、神戸で暴力事件をまきおこしました。

一方、この頃、アナキズム運動の弱体化をうれた人たちはどうしてもこの際、強力な党組織をもつて、全国的な統一と團結をはかり、運動を再建拡大するほかないという考えをもつようになり「**無政府共産党**」を結成しました。委員長は植村諦主なメンバーは、二見敏夫、相沢尚夫、入江汎、梅本英三、井上信一、小林一信、山口安二、田所茂雄、秋本義一、三井剛、浅倉トクノ、松原五十郎、茂原淳三、朝野温自、志岐義晴、韓

同月、笠原、井上、辻井民之助、岩切亮、小松原死解雄、野田鬼雄らによつて、自由律短歌運動の「布引詩歌」を神戸で発刊されました。

4月全国自連は陣容をたてなおしオ三回大会をひらきました。警察のため解散させられました。

7月、大阪では遠藤らの交通労働、その他、農民組合、水平社等、社大党や総同盟以外の左翼団体すべてが参加して、戦争反対のために、暴圧反対ファツシヨ粉砕同盟を結成しました。

(これはフランスの人民戦線方式に学んだもので、スペインの人民戦線からゲケレイ文がきました。昭和8、9、10年と活動しました。【逸見吉三】)

8月には京都にも反ファツシヨ自由同盟ができました。

神戸では5月に井上信一らの「生活と思想」6月には高橋利夫らの「ブラック・リスト」が発刊されて、文化活動に懸命の努力をつづけていました。

また8月には、神戸の三菱電機製作所の小林一信首切り反対斗争で、多田(6カ月)山口(6カ月)芝原(8カ月)等の犠牲者を出しました。

☆一九三四年(昭九)

独占資本と国家権力とのむすびつきはますます強まり、軍閥の発言力は増大してファツシズムの道へまっしぐらにつき進みます。労働者の斗争はおとろえ、共産党は分裂し、合法無産政党は右へ右へ旋回、戦闘的な労働組合は次々にかい滅してい

国東等でありました。

☆一九三五年(昭一〇)

共産党中央の指導部はこの年にあいつぐ弾圧のためにカイ滅しました。9月、神戸摩耶山において、無政府共産党の二見、井上、小林等は、芝原淳三をスパイのうたがいで問いただし射殺するという事件がおこりました。11月には同じく無政府共産党の高田農商銀行シユウ撃事件を理由に、党員の全国的検挙があり、神戸では、相沢尚夫、同あき子、二見敏雄らが上海へ逃亡をくわだて、水上署に相沢夫妻が検挙されました。

たちまち反動攻撃に對して、労働者は人民戦線戦術をとつてたたかひをつづけていましたが、一方国家主義的労働組合も勢力を拡大してきました。

☆一九三六年(昭一一)

1月長野県を中心とするアナキスト団体、農村青年同盟(黒色パルチザン)は、農民の即時武装ほう起をとなえて、三五〇余名が検挙されて、運動は全滅しました。

2月には二・二六事件がおこり、翌12年には社大党は完全に国家主義に転向、合法左翼は人民戦線事件でカイ滅、左翼団体には、結社禁止、自発的解散があいつぎ、7月には日中事変がおこり、翌13年には産報運動が発足して、完全に暗黒時代に突入してゆきます。

(三)おわりに

私たちは今、この国のアナキズム運動の、大阪を中心とした

運動のうつりかわり、そして戦前の運動の消滅までの道すじをたどってきたわけですが、私たちは今ふりかえつてみて、さまざまな歴史の教訓をみいだすことができます。しかし、どのようにして運動は発展し、どういうわけで運動は消滅していったかという、運動の再評価についてここで早急な判断を下さず、今後の私たちの仕事として続けていきたいと思えます。ただ私たちが今はつきりいえることは次のようなことです。

私の歩いて来た道

河本乾次

私は過去を顧みて、無政府主義の原理を究めてとか、バクーニンやクロポトキンの思想にふれたとか、学問的に理論的に把握したとかそういう筋の通つたものを持つていない。私は生活の戦いの中で、いつしかアナキズム運動の中へ入つていた。そして私は路頭のアナキストだと自称している。

終戦後発行された「平民新聞」に山鹿泰治さんが、自分の運動経歴を「無政府主義修業」と題して発表された。私はこの「修業」という題名に感動と共鳴を見つけた。私の歩んで来た道は山鹿さんの「修業」に通ずるものがあり、又、私の「武者修

中日事変から大平洋戦争へ、一時は完全に制圧したかにみえた、この国のファツシズムがどのような道をたどつたかは、すでに私たちのよく知っているところだ。歴史は、どのようなまわり道をして、たとえ長い年月をかけても、人類にほんとうの幸福をもたらす思想が最後に勝利することを示しています。それ故反動の勝利は常に一時的なものにすぎません。(完)

(文責 崎本正、山口英)

業」でもあった。

② 大正七年と云えば米騒動のあつた年で、この年を前後して、大阪では朝日新聞社が民主主義の宣伝紙化したと、国家主義団体から攻撃を受け、長谷川如是閑氏や大山郁夫氏等の退社騒ぎがあつた、この朝日新聞社事件で、私は長谷川氏の名が印象づけられ、後に「我等」を発行するや愛読し、彼の反政治的、反権力的な論説に多分のアナキズム的なものを感じた。その頃の私は二十才時代で平凡な青年に過ぎない、たまたま田岡嶺雲の「日本叛臣伝」を読み、時の政府に叛いた暴動事件に血を沸し又横山源之助の「日本の下層社会」などを讀んだ。国木田独歩の「牛肉と馬鈴薯」を読み、驚きたい。というあの名文句に刺戟されたのか、未見の世界に触れて驚きたいという衝動が、遂に、驚きを求めに家を飛び出し、新聞配達や、人力車夫となつて釜ヶ崎や天六の貧民街を転々としながら、その頃、毎月

催されていた道頓堀・アイオイの楼上での「文学同好会」や木谷逢吟氏の「近松研究」発表の会に出席していた。

③

大正八年、私が二十一才の正月になんのあてもなく飄然と上京した、東京での生活はやはり新聞配達や、臨時郵便夫や、星製菓の職工などやつたが、失業中が多く、その頃の金銭で一日十銭生活をやるうとして、朝は五銭のビスケットと水を飲み、昼抜き、夕は五銭の焼芋で暮した。これでは栄養が保てないの、豆腐粕(おから)にメリケン粉で団子を作り、これを食油でいためた独特の食事をつた。そして、私は意外な家に入居した。品川の五反田の街はずれに「光風学舎」と看板をかゝげた棟の傾いたボロ家に、私は「光風」と云う名に興味を感じて入舎した。ところが驚いたのは、生徒は一人も居ない、先生は七十に近い老人で夏も冬も汚れた単衣一枚ぎり。夜具もない犬を十匹ほど畳の上にあげて飼つて寒くなれば犬を抱いて寝る茶碗も鍋も欠けたものばかり、食事は麦ばかり炊いて食つていゝる。乞食の生活である。先生の素性は、榎本栄洲と称して、かつて中江兆民と共に自由民権運動に活躍した人物であつたが、世をすねて落魄の姿であつた。時々近くの大井町の貧民屋へ出かけ、五厘学校と云つて貧民児童から五厘ずつ集めて読み書きを教えていた、この先生についての数奇の経歴を、東京の「時事新報」が三日間に亘つて記事を書いたことがある、この家で弱つたのは犬との同居で、夜寝ている枕頭で、小犬が糞尿を

たれる悪臭と不潔に悩まされて、この家から出ようと思つたが夜ロソクの灯に十匹の犬を周囲におき白色長髪の怪異相の榎本先生の口から、中江兆民の話や、老荘の道や、陽明学、易学など、滔々と説き出す弁舌に魅了されて五カ月位宿泊していたこの時、聞かされた雑学が後に、平民文学者岡田播陽氏の大塩平八郎の革命論と共通するところあつて、長谷川如是閑氏に対するように、アナキストでない諸氏からアナキズム的な要素をくみとることができた。

④

それから大正八年の初夏、築地の貸席川崎屋に於ける、労仿問題演説会・事件に出かけたのがきっかけに、山崎今朝弥氏が催した「平民大学講演会」の聴講生となり、続いて、堺氏、山川氏、荒畑氏の「労仿組合研究会」や、大杉氏、岩佐氏、近藤氏の「北風会」に出席するようになった。又、加藤一夫氏の「自由人連盟」にも参加した、たまたま岩佐老人の「労仿組合否定論」で問題になつた論争に出会つた。その時の私の記憶では、「労仿運動か、革命運動か」どちらを執るかが問題になつて、早く言えば革命運動とはアナキズム運動のことで、労仿運動を執るとなると、革命運動に反対となり、それはアナキズムに反対となるので、あの場合、アナキストであれば当然、労仿運動反対、労仿組合否定まで論調を進めなければならなかつた。その席上で岩佐老人がアナキスト側を代表して論戦の矢面に立たされたわけである、それが後々になつて色々の人達から岩佐氏

の論説の中の前後を抹殺して「労組組合無用論」の二字だけを特に引抜いて強調したために問題になつてゐるようである。

⑤ 大正九年に入つて「社会主義同盟」の創立に参加した理由で就職していた星製菓を蹴首された私は、生活に窮して浅草観音堂裏の「蝶々料理店」へ下足番に入つた、ところが、この店の経営者が社会主義撲滅を看板に盛んに殴り込みをかけていた「大和民労会」の会長河合徳三郎であつたため、私が彼の寝首をかかために潜入したことになつて、彼の度肝を抜いたものゝ、そのまゝ警視庁へ持つてゆかれた。警視庁の特高課では私を意外にも、その時の才四十二議会の衆議院の門前に爆弾を仕掛け、これは未発であつたが、その有力な容疑者として取調べはじめた。私は地下室のブタ箱で運命の転変と悪戯に苦笑した。東京でのブタ箱入りはこれが最初ではない、この前に愛宕署へ山崎今朝弥の宅での集合が解散になり、その帰途、和田久太郎君と望月桂君と私三人が留置された、久さんは五六人の警官によつてたかつて殴られるのを見た。画家の桂さんは、デツカイ目覚置時計を懐中時計の替りに腰にブラ下げていたことなどが印象深く残つてゐる。やがて警視庁での取調べも証拠不十分で永いブタ箱生活から釈放されたが、その時は、健康を悪くしていたのと、東京では食い詰めたので大正十年二月頃、大阪へ舞戻つた。

大阪に帰つて間もなく大正十年の四月に南海電鉄に入職した。駅夫から電車の車掌となり、大正十三年に「西部交通労組組合」に加盟するや、その夏に南海が争議の火蓋を切り、続いて市電の争議となつた。私は九月に南海を蹴首された。この南海在職中、約四年間が私の運動の空白を作り、大阪での有名な事件の埒外にあつたことを未だに残念に思つてゐる。それは大正十一年の「全国労組組合総連合大会決裂」と、東京で「自由人連盟」で知つた中浜哲君、建設者同盟の集會での帰途共にして、電車の中で色々と話合つた古田大次郎君等の「ギロチン団事件」であつた。私が南海の青年分子を集めて「先駆者同盟」を組織して盛んにアジビラを散布した。ところが偶然にも同名の「先駆者同盟」を作つていた木本凡人氏から、こちらと紛らしいから「南海先駆者」と名乗つてくれとの申入れが機縁となつて、大正十四年一月二十四日に木本氏の二階で催した「幸徳秋水追悼會」に招かれたのが、大阪でのアナ系の人々と接触を持つ最初であつた。

⑦ それから以後、「関西黒旗連盟」や「関西労組自由連合會」に参加するに至つた。

この大正十四年に、新世界の「いろは」で浜哲の詩集「黒パン」の記念出版會や、天王寺公園の茶亭で「高尾平兵衛」の追悼會の催しに出席した。

大正十五年に、早大の学生で卒業論文に大阪市電争議を主題

とした「電車ストライキ」を提出した桑田次郎君から話があつて、南海電鉄の争議記録を編集した「南海の労組運動史」の出版に協力した、この桑田君は別に、中西伊之助氏の「政治運動と経済運動」と云うパンフレットの発行資金も出した。このパンフはその当時大阪地方ではサンチカリズムの宣伝に役立つたと思う。

昭和二年以後は大阪市電出身の遠藤喜一君と共に「大阪交通労組組合」を結成したり「自由思想研究会」を作つて、大阪市電や南海電鉄や京阪電鉄の有志を以てアナキズムの研究會を開いた。又「西部交通」の關係から、中西伊之助氏の「農民自治

ふりかえつてみて

箴部義之助(談)

ようやくこれからのびようとしていた日本の社会主義運動は明治四三年の大逆事件でほとんどカイ滅状態になりました、それから大正七年の米騒ぎまでは大した動きはなく、特に関西方面で運動がはつきり復活したのは米騒ぎ以後でした。

大正八年の三月に岩出さんの出資で「日本労組者新聞」が発刊されましたが、大阪ではこれが大逆事件後、最初の定期刊行物でした。そして「日本労組者新聞」の発刊を機会に、五月ごろ、これも大阪では大逆事件後始めて「白雨會」という思想

會の〃大阪府連〃を受持つた、その自治會から出た山中君が地方評議會から脱会した中村君や佐野君、現在東京に居る白井新平君等の「大阪一般労組組合」が生れて、関西自連に参加した、それは大國町に自連の事務所があつた頃である。

昭和六年に入つて、その九月に遠藤君と共に雑誌「自由連合」を発行した、これも資金難と戦争下の弾圧で昭和九年の四月才十号を出して廃刊した、間もなく遠藤君は故郷の鳥取で病死し、それからは終戦迄は、私は無力で手も足も出なかつた。

団体ができました。私は文通していた堺枯川さんのすすめで、この會の集會に出席するようになりました。古い人たちは十六七人おり、若手では山田正一、西尾末広、私などがいました。古い人たちの間のいきさつは新入の私にはよくわかりませんが、後にスパイ問題で分裂しました。当時、警察のスパイが思想団体に潜入したり、買収されてスパイ行為をする者もよくあつたので、古い人たちはスパイ問題には特に神経質になつていました。一度スパイに集會をすつばぬかれると、検束はされる、起訴される、出版物はおさえられるというひどい目にあうのですから、むりもなかつたと思ひますが、あいつはスパイくさいとか、だれそれはスパイだとかいふ、真偽とりまぜた風評が同志間に感情的対立をおこし、はては組織の分裂にまで発

展することがよくありました。

当時の大阪の運動には大たい三つのセンターがありました。その一つは岩出さんの家で、ここへは、共産主義的傾向の人が多く出入してました。その二は、武田さんで、ここへはアナキストが集つてきました。その三は逸見直三氏宅で、ここへはその他の各派の社会主義者がよつていました。

「日本労働者新聞」の出た年の十月、大阪中之島の中央公会堂で、同新聞主催の「労働問題大講演会」がひらかれ、東京から堺さん、生田さんがこられ、大阪での運動もこれからいよいよ盛んになつていききましたが、この席上で、世話人の逸見直三さんや、息子の吉三君とはじめてあつたわけです。当時私は店員生活をしていたので、警察からしらべに店へやつてきたりして、私が社会主義者の集会へ出ていることがしれると、どうしても店におれなくなり、店をとびだして九州へゆき、三年ほど運動から遠ざかりました。

大正十一年ごろ、大阪でふたたび運動の中へ、とびこみました。当時アナキストの多くは、思想宣伝、思想運動に熱中していましたが、私はわずかな人数で暴動をおこしてみても、革命ができるとは思えない。思想宣伝だけではなく、もつと足が地についた進動をやらなければダメだ。そのためには労働組合の中へ入つて行かなければならないと決心しました。そのころ北大阪には紡績会社がたくさんあつて、その労働者によつて大阪紡織労働組合というのが結成されてましたので、私と備前又

次郎君とがその中へもぐりこみ、だんだん積極的な戦闘的労働組合にかえていき、総同盟から脱退させて、関西紡織労働組合と改称して、自由連合の方に加盟しました。しかし当時の労働組合というのは、今日の労働組合のような一企業、一工場の従業員全部が、ごつそりとして結成しているといつたものではなく、各企業、各工場の一部の労働者と、組合幹部とのむすびつきといつたもので、労働組合兼思想団体の傾向が強かつたのです。労働運動などは本職をもつていてはとてでもできませんし

また運動なんかをやっている者が職にありつけない時代ではありませんでした。また組合員の数がすくないので、組合の収入だけでは運動をやっている連中は生活できません。そこでいわゆる「リヤク」をやつて生活するということになります、お話にならないはげしい弾圧や、社会の偏見とたたかっている我々のたのみになるのは、結局同志と、自分の力だけです。世論の背景といつたものも、労働者の権利を守る法律もなく、警察はなんとか、かんとか理由をつけてはひつぱりにくるし、社会一般の見る目は冷たいし、いきおい我々の仲間には明治維新の志士のような気風がみなぎつていました。なんとかして得た金は、仲間わけあつて、のみ、く、い、さつぱり使いはたして宵ごしの銭はもたないといつた風でした。

関西紡織労働組合では、備前君と私とが理論派というか、まあ参謀といつたかたちで、いろんな計画をたてる方を受持つてました。中尾、倉地、仲、重岡、東野、前田、下野君等は行

動派でした。資本家は資本家で半封建的な搾取一本槍で、労働者の権利とか生活とかは眼中になく、組合に対しては警察と組んで対抗するといういき方ですし、組合は組合で、たよりになるのは文字どおり、自分等の実力のみといった状態、そこへ志士気分の生活をしている行動派が多いのですから、交渉がゆき詰ると、暴力行為がとびだしてきます。労働争議で二、三人が会社へ交渉に行く、こちらの要求がいられないので、最後の

想い出の人々

小松 亀代吉

黒連の銀座事件のあと、特高の横暴術策と頑迷な家主の泣落戦術にさすがの野蠻人種の猛者連も遂に旗を巻いて千住の家を開け渡した。これを機会にと放浪の旅に出た三上由三、獄にいる村上義博を除く沢田武雄と二人早速時につた。丁度近くに八太舟三の家がある、そこへ転がり込む事に勝手に決めて乗り込んだ、八太は千住の塩せんべい屋の二階で妻君のわかさんと二人で四畳半と三畳の義理にでも美麗だと云えぬ部屋で賀川豊彦辺りから廻して貰う安齋訳で細々と暮らしていたが夫婦仲は非常にむつまじかつた、二人は当然当てられ通し、あゝ人生は五五の春とかなんとか世迷言をいい、二十五才まではあと三四年ある、いざという時の為に地方状勢を知る必要がありと勝手な

手段で暴力行為に出る、すぐ警察につかまると、かわりの同志がまた会社へおしかける。こういう風にして要求がとおることも多かつたのですが（事実関紡といえは当時の北大阪の紡績資本家には大変おそれられてました）労働運動によつて、足を地につけた運動をするという最初の志とこちがつて、こういうやり方のために運動はだんだん横道へそれるようになりました。

（文責 山口英）

熱をふいて沢田の郷里、静岡へ都落をした。富士には大塚昇氏が、静岡には牧野等一連の人達が、清水には山口勝清が小坂千里と立籠つていて、漸次活発な動きをみせ、沼津、富士、清水静岡と連日演説会を開催した。当時はほとんど全部劇場を借り宿泊は同志の家でしたので赤字に成る様なことはなかつた。

大正十五年の末、痔疾治療のため大阪の兄の家に保養を兼ねた蟄居生活中、大正天皇の喪、昭和二年の四月山口勝清が突然訪ねて来て福山へ来ないか、未開の土地だ。新しい所の開拓た是非やろうとの事で意を決して同道した。岡山市の中国労働組合自由連合会には糸島孝太郎、高木精一等の闘士連がおつて広範な地域にまで組合員を擁していた。福山市に居を構え月刊解放運動の発行に着手した。才一号印刷のため山口上京中、風の如くに沢田が出現したのにはびつくりした。備後地方にはこれという大企業はなく僅かに福島紡績の工場があるに過ぎず、労働組合らしきものはなかつたが、工業は盛んな所であつた。同

志としても吉津に岡田光春が水平社解放連盟員として気を吐いていた程度のことであり、青山大学がその後、時々三次から訪ねて来た位のものであった。前後転倒したが、解放運動才一号は勿論禁煙、風来坊奴と早速私服が付きまとう。どうにもいけない、沢田と相談の結果、地下足袋姿も勇しく、昔お江戸で磨いた腕をと芦田川改修工事に稼ぎに行つた。お蔭で張込は解かれる、地方の連絡はつく、各地から同志は訪ねて来る、鈴木文治等の演説会には十数名の同志とブチ壊しに公会堂へとナダレ込む、益々活発な動きが出来るようになった。

昭和二年の五月、軻鋳釘会社の争議応援を最手近な福山にてと中国自連の糸島君が依頼に来た。沢田、山口と三人で町町の争議団本部で争議団員と宿泊した。デモ行進中、警官隊と衝突し、公務執行妨害、器物毀棄の罪名の下に検事拘留、福山区裁判所で罰金二十円、早速争議団本部に帰つてみると大阪製鋳労働組合の日野正義が来ていた。色の白い美麗な顔の男で、これが製鋳工かと驚いた。

争議は会社側と度々交渉したが漁村の人達だ、腰が弱い、一人二人と脱落して行く、あと僅かしか残らない、完全の敗北だ止むなく解散と残存団員の心尽しの冷酒で解散式最中、勝ち誇つた軻警察署員数名突如侵入、議論の余地なく、直ちに乱闘、全員検束、眼鏡がとぶ、顔手足は傷だらけ、日野の投げた旗竿が一巡査に突き刺り百日以上の重傷、敵方にも相当の被害があつたらしい、佐々木巡査部長の眼のふちの黒ずんだ顔は殊に印

象的だつた。検事が出張して来る。私の顔を見るなり又やつたな、とニヤリ、してやつたぞと云わぬばかりの顔、糞奴、こちらは張切つた若さだ、何を聞かれても太々しい、非常に悪い印象を与えたらしい。翌日は日野、山口、沢田と争議団員の沖浦

静雄と私の五人が珠数ツナギにされて軻から船で尾道刑務支所へ収容された。東京から静岡、その間の一年の半は留置場暮らしだつた私達にはさほど苦しい事はなかつたし、日野とて度々の検束やたらい廻して困つた顔もしていなかつたが、さすが田舎の青年沖浦の顔は暗かつた。予審判事の取調べ後、面会禁止が解かれ、岡山から竹内老人が来て呉れて軻鋳釘会社ではあの騒ぎに驚いて全面的に要求を受け入れたと聞いた時は嬉しかつたが、それ以上に嬉しかつた事は大阪から逸見君が沢田の本を差入れて呉れたので大へん助かつた。もう一つ、福山の拘置場で色々と智恵つけてやつた松永の若い漁師が雑役と成つて誠に短い鉛筆だが一本人入れて呉れた事は忘れられない。差入の浴衣が綿入に変わる六カ月近い未決生活の後、尾道地方裁判所の公判の結果、日野四年、山口、沢田は八月、沖浦は六月、印象の悪い私は十月と判決され控訴しなかつた。

この裁判で面白かつた事は、沢田が巡査の剣を奪つて切りつけたが失敗に終つた事を裁判長は「被告は巡査の剣を奪つて切りつけた事は殺意があつた」との事だ。これに対する沢田の返答が振つている「巡査が剣を落したから拾つてやつたのだ」とぬけぬけした返答に爆笑、裁判長からネメツケられた。在監中

銀行の倒産や三・一五事件等のニュースが看守から入れて呉れた。備後地方としては珍らしい事件なので看守連、腫物にさわるとは日野は広島へ送られた。看守の心づくしで「行くぞ」「元気でな」と握つた手の温さは未だに忘れられない。沖浦の出た時は知らぬ間だつたが、沢田、山口の時は監房の前まで言葉を掛けに来て呉れた時は一寸淋しい気がした、十月と罰金二十円分だけ働かされて出た外の空気がすがすがしき、矢張りシヤバは良いな――。

獄内で山口、沢田と協議の結果、獄内で発足した黎明社に落付いた、才三回全国自連大会に汎太平洋会議派の除名、伊串英

わが自伝的回想

久保 讓

僕がどうしてアナキストになつたか?と問われれば、生れながらの反逆的性格がそうさせたかと思ふのが適切なように思ふ。

僕の反逆的性格の現われは幼稚園時代に始まる。満四才の頃である。保母さんのいうことを聞かないで、自分のしたいことしかししない、叱られてばかりいた、それだけではない。帰りがけには二列に並んで校門のところまで「先生さまなら」といつて

治の傷害事件、関東の暴行事件に絶望を感じ、その渦中に巻き込まれたくないとして、岡山、倉敷、福山をつなぐ線に止まつてしまつた。思えば残念な事であつた、あれから三十年、日野とはあのみ別れたきり、山口は広島のカカドンで、糸島も岡田も死んだ、沢田は東京にいるらしいが連絡がない。皆良い男だつた。五五の春が白髪混りの年になり浮世の上を上手に泳ぐ様に成つた。長生きすれば恥多しか。

(附記) 先年、福山で無政府主義講演会を開催の節、石川老、小笠原教授と私も同道しましたが、あの当時に播いた種が芽を出したと嬉しかつた。

頭を下げるように教えられている。僕はそれをやらない、頭を下げずに走り出て二、三メートル、くるりと後向きになつて「腹ぼて、ぼて、ぼて」とどなつてから逃げ帰つた。保母さんは肥つていて腹が出ばつていたのである。翌日、そのことで、休けい時間に教室から出してもらえず、時には横抱きにひつさげられて、小学校の方の空教室にほりこまれる。その頃の小学校の教室の戸は分厚い板戸で、四、五才の小供の力では開け閉めができなかつた。幼稚園は小学校の中にあつたので、兄弟が自分の先生を連れてきて、僕のために保母さんによく謝りにきてくれた。毎日、そんなことをくりかえしていた。三つ子の魂百まで、ということになつたわけである。

十四才、父に反逆して家出をした。東京で、苦学生生活を始めた。大正八年、米騒動が勃発した。東京にも不穏の空気が漲った。生活苦を味わつていた僕は胸をわくわくさせて東京中が今にも暴動の騒ぎに沸きたつてあることを待ち望んだ。ところが不穏の形勢が感ぜられるに、くわらず、関西におけるような暴動らしい暴動は起らなかった。毎晩、暴動を捜して歩いたがようやく一回だけ万世橋で可成りの人数の暴徒に出くわした。暴徒の一人となつてワツシヨ、ワツシヨと上野広小路の方向に向つて進んだが、途中後から追いかけてきた警視庁の騎馬隊にすつかり蹴ちらされてしまった。馬に蹴られそこないながら夢中で広小路まで行つたときには暴徒の影はどこにもみられなかつた。さすが夜中に帰つてきたが、これが暴動といふもののみをみた最初であり、暴徒の一人になつたのもこれが始めてだつた。

この米騒動後から、社会主義者の運動が活発化したようだつた。それまで新聞紙面ではほとんどみかけなかつた社会主義者の集会解散、検束、乱斗などの記事がよく眼につくようになった。社会主義とは何だらう。おそらくは政府に反抗することを教える思想だろうぐらに想像していた。社会主義をハツキリ知らないという好奇心から、まず僕の先輩である法学士に社会主義とはどういう思想かと質問してみた。かれは社会主義とは経済学の一学派である、と教えてくれた。早速かれの書棚から分厚い経済学の本を借り出して、社会主義の章を見出して読んだ。

た学校前の駿台クラブに「労働運動」社が移つてきたために、自然出入りするようになつて、研究団体はハツキリ思想団体的な傾向をもつようになつた。しかし警察の干渉で潰れるのも早かつた。社会運動者として学校を去つて運動にとびこんだ連中は数名にすぎなかつた。その中で、中名生君だけがアナキストとしての存在をつづけた。学校内に留まつて、アナキストと自称したのは僕と八木信三（ギロチン事件に連坐）の二名だけだつた。その八木君も京都の同志社に転校してしまつて、結局は僕一人になつてしまつた。ついにには学校の外でも内でも学生出のアナキストは東京震災の頃まで僕一人ということになつてしまつた。

学校を去つた中名生君は非常に活発に運動した。戸塚源兵衛のかれの家は労働運動社を除いては、アナキストの溜り場だつた。そこに集まる連中で「五月会」という結社が組織された。後、ギロチン事件の主魁として死刑になつた中浜哲君も当時はまだ立ん坊をやりながら運動していた。僕は「五月会」の旗をもつて二度ほどデモに参加して、一度は逃げ、一度は検束されたことを覚えてゐる。

駿台クラブの「労働運動」社のあとに望月桂君が「パンツト凶案社」の仕事場をおいた。こゝはまた「労働者」新聞（オ二次）の事務所でもあつた。山鹿泰治君と初めて会つたのはこゝだつた。

中名生君が「小作人」を發行していたが、これには近藤憲二

十六才の中学生の頭では何のことやらサツパリ分らない。政府や官憲に反抗することなど、どこにも書かれていない。ガツカリした。M大学には入つてから間もなく普通選挙運動に参加して、時の原敬政府への反抗の場を演説会やデモ運動に求めた。ついに検査され、幾日間かの拘留を言渡された。拘留明けに釈放されるものとばかり思つていたところ、拘留された警察から警視庁に送られた。数日にわたつて指紋や写真を撮られた。今度こそは放免されると思つたのに、市ヶ谷刑務所の未決監に收容されたのだつた。罪名は騒擾罪である。正直のところ、未決監へ送られるにいたつて、心身ともに参つてしまつた。警官や刑事達に殴られたり、検束されたりすることについてはもとより覚悟の上のことだつたが、刑務所生活の覚悟はできていなかった。案外早く不起訴処分で出所したが、当時前科者になつても平気でいられる覚悟をもつたためには相当の決心が必要だつた。出世主義教育によつてたゞきこまれた「地位、名譽、財産の三大欲望を捨て切れないうきぎり、社会運動に挺身するなどということはおこがましいかぎりだ、とは覺つたものゝ、十八才のプチ・ブル青年が「地位、名譽、財産」というブルジョアの野心を放棄するためには可成りの努力を必要とした。

学内に「オーロラ協会」という社会思想研究団体が設立された。当時、帝大に新人会、早大に建設者同盟、法大に扶桑会という学生思想団体がすでに存在していた。「オーロラ協会」は最初、思想研究団体として出発したのだつたが、事務所を置い

君が費用を出していた。その頃、ロシアから帰つた、高尾平兵衛、吉田一君の主唱でトロツキーの協同戦線論にもとづき戦線同盟が結成された。中名生君がこれに加盟した。それで「小作人」社は千駄木の望月桂君の家に移された。「小作人」發送の晩に欠かさず集まる常連は近藤、山鹿、僕だつた。

大正十一年、大杉の日本脱出の留守中、積極的に運動に乗り出してきたのは加藤一夫だつた。かれは「自由人」という新聞を發行していたが、どういふ風の吹き廻しからか、右翼の石黒鋭一郎、平岩徹らが転向してきて加藤一夫をかつぎあげ「自由人連盟」を結成した。加藤一夫は大杉に代つて留守中の運動を指導するんだと意気込んでいたが、かれは決してアナキストではなかつた。一般にはアナキストだと思われていたが、議論になると、僕はニヒリストだ、アナキストはこちらだ、と言つて質問の矢を僕に向けさせるのが常だつた。元來が詩人で、トルストイの翻譯を専門のようにやつていた。

大正十二年春頃から僕は大阪に落ちついた。この年、東京で車輛会社のストライキがあつた。総同盟所屬の組合員達がこのストライキを裏切つた、これを機に自由連合派の組合は労働者階級の裏切り者総同盟を撲滅せよ、と叫んで盛んに各地で演説会を催し、氣勢をあげた。京都では演説会開催当日街頭で自由連合派の連中が総同盟の連中に襲撃され、負傷者さえ出した。もちろん三条青年会館の演説会はメチャクチャだつた。僕が応援にかけつたときは乱斗直後で総同盟派がスクラムを組んで

ヒロバ

JAG

6

目次

特集

関西のアナキズム運動	1
私の歩いて来た道	18
河本乾次	18
ふりかえつてみて	21
箴部義之助	21
想い出の人々	23
小松亀代吉	23
わが自伝的回想	25
久保謙	25
後記	28

引きあげたばかりだった。ついで堺の公会堂でやはり「総同盟撲滅演説会」が開催された。総同盟側は西尾末広を指揮者として隊を組んで会場に乗りこんできた。かれらはワツシヨワツシヨと騒ぎたて、演説を妨害した。僕は二階から自由人社作製のピラをまいて検束された。総同盟側は堺の組合員が後から四、五名検束されてきた。釈放のときが一緒だったので、警備前に対峙の形となりケンカが始まりかけたが、その中の年長者が仲に立つて僕をその場から先に去らせたので、ことなきをえた。このとき僕が検束されたのを誰れも知らなかつたのは、うかつな話だと思ふ。

それに続いて大阪天王寺公会堂で「自由人連盟」主催の演説会がもたれた。この演説会は、当局のこつびどい弾圧にあつた警官との乱斗で精魂つきて気絶してしまつたことを想い出す。大杉が帰つてきた。九月一日大阪にいた僕は大杉が殺された日まで警察に留置されていた。

編集をおえて

▼この号は、京阪神を中心とした戦前のアナキズム運動史を特集しました。その意図は前書にみられるとおりですが、たしかに、戦後の風潮によつて、戦前のアナキズム運動は不当に過小

評価されているようですし、そのためまともな正しい運動史もみあたらず現状です。当時活躍された方の多くはなくなり資料もきえ失せていますので、私たちはできるだけの努力をしましたが、自信をもてるものではないかもしれません。時間をかければもうすこし、ましなものになるかもしれません。今後あまれるであろうより正確で内容ゆたかな運動史の参考までに、とりあえず発表することにしたので、まちがっているところ、かけている点にお気づきの方は「ひろばの会」あておしらせねがいます。また当時のよくわしい状況を御承知の方もおしえ下さればさいわいです。年表の他に個人的な追憶をのせました。私たちは、これを単に昔なつかしい思い出話として読みずることなく、この小編の中に想像を絶する困難な条件の下で、たたかいをつづけられた方々の貴重な体験をくみとりその不屈の勇氣に深い敬意をささげたいと思ひます。

(山口 英)

▼従前のようなタイプ謄写印刷が出来ぬ事情が生じた。所定の発行日に間に合わせるため、とにもかくにもということで景気よく活字印刷にしてしまつたが笑のところ、予算額を大きく超過して問題が今後にのこつてくるわけで、ぼくとしては大へん心労している。出来れば今後も活字で出したいがどうかみんまでこのことを一緒に心配してもらいたい。引続く七号の編集も殆ど出来ている筈。

(向井 孝)